

ももさと 通信

2025年
2月15日
第13号

〈発行〉社会福祉法人桃郷 〒649-6112 和歌山県紀の川市桃山町調月58番地3 TEL 0736-66-8851 FAX 0736-67-8851



すべての子どもに豊かな育ちを

URL <https://www.momosato.com>
E-mail momosato@galaxy.ocn.ne.jp



年末行事「しめ縄作り」を地域の方と一緒に

放課後等デイサービス事業部 小方 和紀

毎年の恒例行事となっている「しめ縄作り」を昨年12月に体験させていただきました。

この行事は、毎年、桃山町地域の方々にお越し頂き、しめ縄作りを使う材料についてのお話や飾り方も教わりながら作っていました。

最初は、3つの束になった藁をまずは1束ずつねじり、3束がねじり終わったら編み込むように絞めていきます。この工程では、2人の力を合わせてしっかりと絞めていきます。「できた!」と思ったら、束が緩んだりしてしまい、何度もねじって編み込んでいく工程を繰り返していき、仕上げ前には地域の方々のお力を頂きながら、しめ縄が完成できました。

しめ縄の飾りとなるのは、御幣(ごへい)・裏白(うらじろ)・橙(だいだい)など。新しい年を迎える新しい年を迎える「めでたい」気持ちを込めながら、しめ縄に飾っていきます。飾り付けの工程は、子どもたちひとりひとりに地域の方からつけ方や飾りの名前を教えてもらいながら飾っていきます。「頑張った!」「難しかった」しめ縄作り。飾り付けも出来て完成した時は、思わずしめ縄を両手で持ち上げて大人たちに見せている姿がありました。

しめ縄作りの最後は、これも恒例となっている豚汁を頂きながらの少休憩時間。冬の作業の後には温かい汁物は特に美味しく感じられます。子どもたちもつい急いで食べようとするのですが、アツアツの具材に対して「フーフー」しながら食べている様子で、みんなでほっこりできた時間となりました。

しめ縄の完成と温かい豚汁を頂いた後は、公園へ散歩に行き、広場で思いっきり遊び、気持ちも身体も充実した1日を過ごせた様子でした。

近年は完成品を購入したり、時代に合わせて少しアレンジされた物がみられる中ですが、昔からの伝統を自分の手で作っていくという機会を頂き、ものづくりの大変さや完成した時の充実感を味わえる時間をこれからも大切にしていきたいと思っています。そして、伝統や風習を伝えていく中で、地域の皆様のお力を頂きながら進めていくことにとても感謝しています。これからも、子どもたちや職員にとっても素敵な経験ができる場所でありたいと思います。

実践報告会を開催

さる11月30日（土）午後1時から、紀の川市きらめきセンター「ビーチホール」において、実践報告会を開催しました。

当日は、役員及び職員を合わせて70名の参加があり、第1部では各事業部より1事業所ずつ計4名が実践報告を行いました。第2部では参加者がグループに分かれて意見交換を行い、その内容を各グループから発表してもらいました。そして最後にまとめとして、竹澤先生からご助言をいただきました。

○助言者 竹澤大史先生（和歌山大学教育学部准教授）

（まとめ）

○報告者 澁川亜弓（あすなろ教室管理者）

宮井 瞳（ひまわり園保育士）

高橋真伊（青空つばさ管理者）

清水千鶴（桃郷障害児者相談支援センター管理者）

○司会 植田京子（ひまわり園園長）

自分の好きな世界を広げつつ大切!! 集団で繰り返し生活をつくって

澁川：2歳児を中心に毎日の分離保育をしている『あすなろ教室』。初めての分離の子ども達が多く、最初は泣いてしまう子ども多いのですが、少しずつ安心して登園できるような保育や、保育士や友だちとの関係性を広げていく取り組みを心がけています。また、保護者との関係づくりも大切にしています。

あすなろ教室に入園してきてくれたAさん。入園当初は、保育士や友だちなど、周りにほとんど興味のなかったAさんでしたが、毎日顔を合わす友だちや保育士の事がAさんの生活に入っ



発表者1（澁川先生）

ていったように感じます。その中で、好きなことを見つけ、好きなことを深めていくことでAさんが大きく成長したように思います。毎日の手遊びやリズムを楽しむことで、模倣が出て、言葉が出ることにつながっていったように感じます。給食のエピソードでは、友達が食べていたものを見て、苦手だったけれども食べてみようと思ったのではないかと思います。また歯磨

きも嫌だけど、保育士が毎日歯磨きに付き合うことで、本当はしたくないけれど、してみようと思えるようになってきたのだと思います。毎日の積み重ねの大切さを実感しました。「今日は、口を動かしていたね」「今日、すごく目が合ったんだよ」「しつかりと、バイバイって言ったよね」など、日々変化していく姿を保育士間で共有し、『次はこんなことをして反応を見たい!』と新しい関わり方をみんなで想像しワクワクします。そして、Aさんの変化を、保護者にも返すことでお家の人の気持ちもほぐれ、それがまた子どもの元に返っていくということを、この実践を振り返ることで再確認できました。

子どもにとっても親にとっても初めての集団の場となる事が多いあすなろ教室。1年でしつかりと力をつけて生活の土台を作り、地域園に行くか療育継続するかを見極める大切な時間です。1年限定の保育の場だからこそ、子どもだけでなく保護者にも丁寧な関わりをしていくことが信頼関係につながり安心して子どもを任せてくれるようになっていくのだと思います。それと同時に保育士もぐつと子どもと関わる事ができるのだと思います。子どもはもちろんですが、保護者の人にも安心してもらえる保育を心がけていきたいと再度実感しました。

親子保育からの学び Bさん親子との出会い

宮井：私が実践報告で発表するBさん



発表者2（宮井先生）

との出会いは今からおよそ2年前です。Bさんが毎日の療育・保育の場で過ごした成長、親子保育や日々の丁寧な関わりの中での母子関係やBさんの周りの大人達の変化、母自身の変化を伝えたいと思います。

Bさんは、ひまわり園3年目の5歳児です。3年間のひまわり園での生活で好きなモノがたくさん出来たように思います。日々の生活への見通しも部分的に持てるようになりました。周りの様子を見て友達の流れに付いていくことも増え、とにかく不快が多かった世界から、少しずつ自分自身が心地よい場所や物、人を見つけて、園生活をゆったり笑顔で過ごせることが増えました。そして3年間の親子保育の時間を通して、確実にBさん親子に変化がありました。時には職員が上手くサポート出来ない時もありましたが、Bさん自身の成長とグループの保護者との関係が母の姿を変化・成長させたのではないかと考えています。職員の願いとして、Bさん親子がこれからも社会的サポートを受けながら、親子で手を取り合い暮らし続ける未来を願っています。

祖母が母をBさんの「母親にした
い。」と強く願い、ひまわり園へ入園。
今でも時々きょうだいのように見える
Bさん親子ですが、母は、Bさんと向
き合うことが増え、親子関係が深まり
ました。その背景にあるのは、毎日の
療育や保育、職員の丁寧な関わり、そ
して「桃郷の親子保育」の存在だと強
く感じました。近年、共働きの家庭が
当たり前になり、保護者から求められ
ているニーズも変化しています。親子
保育を負担と感じている家庭も多いと
思います。そんな中でも改めて親子
保育を大切にしていきたいと感じまし
た。保育士による保護者向けの学習会
で使用する言葉に、「当たり前前の生活
を少しでも特別に…」という言葉が
あります。これからも毎日を大切に、
自分自身に出来ることは何かを考え、
学び続けていきたいです。

僕の居場所になった 「信頼する」とは、

高橋：本人のやりたい事と周りの仲間
の気持ちをしり合わせながら日々の葛
藤や自分を認めて欲しい、僕はここ
にいるという気持ちを上手に言葉にでき
ず仲間の輪から外れたり、一人で出て
行ってしまったりと言葉にはならない
表現に職員がどう向き合い、どう仲間
としての意識を持てるように支援する
かを実践報告します。

対象児はCさん。祖母からのSOS
により放デイ利用開始となりました。
青空つばさに来た初日、ドライブ散歩

に出かけることになり、車に乗ろうと
しないCさんに声掛けすると怒ってい
る様子で、『俺は歩いて家に帰る』そ
う言うCさんに祖母に迎えに来てもら
うか、歩いて帰るなら一緒に帰ると伝
えたが、一人で帰りたいという主張が
強く、歩き出した彼の後ろについて行
く。『ついてくるな!』というCさん
を引き留めながら少し距離をあけ後ろ
について行つた。『俺は事故にあつて
死んでもいい。先生に関係ないやろ』
という言葉に、「私にとつてあなたは
大切な存在。ケガの一つもしてほしく
ない」と一生懸命「大事」「大切」と
いう事を態度や言葉で伝えた。彼は泣
きながら突き放そうとしたが、次第に
気持ちが落ち着き、最後には自分か
ら『叩いてゴメン』と言った。私は大
切な存在という気持ちがCさんに通じ、
Cさんは自分の事を見てくれたと感じ、
その後は何事も無かったかのように一
日を過ごす事ができました。Cさんが
発する反抗的な態度は相手に共感を求
めるサインだったのでないかと考え、
寄り添いながら集団活動での楽しさや
ルールなど伝えていきたいと思いまし
た。



発表者3 (高橋先生)

大好きだった母からの無償の愛を求
め、寂しさや悲しみと葛藤していたC
さん。母親にはなれないが、彼としっ
かり寄り添い、良い事も悪い事もすべ
て受け止め、あなたを守りたい、いつ
もそばに居るよと一生懸命伝えてき
た私たち。思春期だからその葛藤。
そつとしてほしい、でも心配もしてほ
しいなどうまく気持ちを言葉で表現で
きない悔しさはあるものの、この人な
らと信頼できる人が周りにいることで、
どんな場面でも失敗を恐れず、自信の
無い事にも挑戦できたと思います。

次のステージでも自分が安心して過
ごせる「居場所」を早く見つけ、その
場所に早く適応していく事が大事と考
えています。居場所は、自宅・職場・
地域・心許せる人がいる場所などたく
さんあれば、色々な思いを分散する事
ができ、自分にいま必要な場所を選
択して地域で生活できるのではないか。
これから卒業するまでにまだまだ課題
はあるものの、Cさんが社会の一員と
して生活していけるよう引き続き寄り
添っていききたいと思えます。

Dさんに笑顔がもどった！ 「支援ネットができたこと」

清水：2年前から関わりだした、Dさ
ん・Eさん一家。現代の社会問題の縮
図のような家族に対する実践を振り返
る中で、一事業所ではどうにもできな
い課題に対して、どのようにアプロ
ーチしてきたのか。実践を振り返りたい
と思います。



発表者4 (清水先生)

2022年12月、Eさん宅へ転居し、
年明けからは支援学校に転校するとい
う怒涛のスピードで、Dさんの新生活
がスタートしました。放課後デイなど
の障害福祉サービスや訪問看護、行政
の方も定期的に訪問する中、生活も安
定し、Eさん宅でももうすぐ1年になる
かという時のこと、その中心であるE
さんの病気が発覚したのです。収入が
なくなることや病気のことなど、Eさ
んの不安軽減に向けて、支援の輪が広
がっていきました。目の前の課題に向
き合っていく中で、Eさんにはケアマ
ネジャーや訪問看護、Dさんは行政や
放課後等デイサービス、支援学校、訪
問看護など。支援者の輪が変化してい
きました。

Dさんのケースを担当して約2年。
複合的な課題を抱えるケースの支援は、
一事業所だけでは絶対不可能と強く実
感することになりました。また、この
ケースが、私が桃郷で仕事をし始め
た1年目・2年目に担当することにな
っていったら…。これまで受けてきた
学習会や研修で、「ネットワークは大
切。顔の見える関係で。困っているこ
とを相談できる関係を等」と何度も耳



会場風景

にしてみました。その時は「うん。うん。大切だよ」と、わかったような気になっていましたが、今回のDさんのケースを通し、「ネットワーク・顔の見える関係は大切です」と心の底から思える機会になりました。

Dさんの暮らすEさん宅は、これからも課題がいつぱい出てくるでしょう。しかし、支援の輪が広がっている中、

出てきた課題に対して何とか対応していけるのではないかと考えています。

子どもを軸にその家庭に関わっている私達相談支援専門員ですが、その子の支援だけでなく、家庭全般の支援が大切だと思っています。療育や学校などで安心して過ごせていても、家で不安なことがあれば、療育や教育の成果は現れません。子どものためにも、まずその子の所属する家庭が安定し、その子が安心できる環境を作る手助けが大切と、これまで以上に、「この困りごととはまず、この人に相談!!」というよく言われますが、顔の見える関係、ネットワークを作り、子どもたちの支援に関わっていきたいと考えています。

4名からの実践報告を受け、参加者からも様々な意見や感想がありました。



司会者（植田園長）

司会者にアイスブレイクで緊張感をほぐしてもらった後は参加者が8グループに分かれてのグループ討議、各グループで活発な意見交換がなされました。そして、司会者から指名された順番で各グループからの発表がありました。

講評・まとめ（竹澤先生）

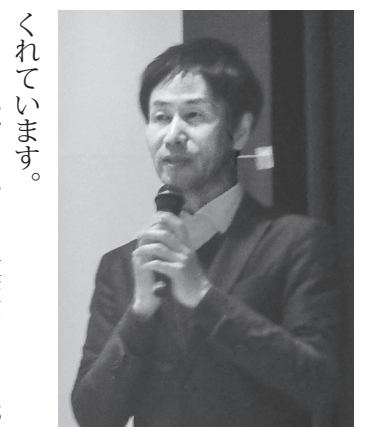
私も発表とディスカッションを聞かせていただいて、素晴らしいなと思いました。

Aさん、すぐ成長され発達の力つてすごいんだなって改めて聞かせていただきました。コミュニケーションの発達により、指さしとかジェスチャーとかの行動につながっていく。友達に対する興味とか関心とかがすごく広がっています。

それから、Bさん。お母さんは家庭と園との信頼関係を少しずつ築けている。関係をつくることについてすごく大事かなと思いました。不快さの表現が回避というお話もありましたけれども、物凄く大事な力で、Bさんなりに表現しているクールダウンの方法です。それから母の変化、自分をわかってくれる環境があると安心して生活している。先生方がお子さんとうまく接しているともわりに影響が出てきます。

「当たり前前の生活を少しだけ特別に…」、非常にすばらしいと思いました。

Cさんの自己理解、思春期、友達との関係性がすごく大事になってくる。家庭環境とか生活環境の変化が原因で自信のなさにつながっている。すごく丁寧に関わってくれています。思いを受け止めてくれることで、Cさんが折り合いをつけられるようになる。キーパーソンの存在、関わってくれる人が1人いると変わっていく。いまは担任の先生がキーパーソンの役割を担って



助言者（竹澤先生）

れています。

Dさん、ほんとに大変ですよ。積極的に関わってくれています。アウトリーチというか、事前のアセスメント。具体的にいつなげる時にリファ、自分だけで解決するのではなくつなげていくことがすごく大事です。リファするためには、この人なら大丈夫、任せられるという関係づくりが大事。家族を中心としたアプローチが大事。ネットワークを活用し、チームで取り組むにはコーディネーションが必要です。

次にまとめになるかわからないですが、発達段階の話をしようにと思います。生活年齢は階段状になっています。

タテの発達とヨコの発達。階段を上るのはタテの発達、質的な変化。より高次の水準ができるようになること。一方、ヨコへの発達は量的な変化。いま持っている力を色んな人と色んな場所で充実していくこと。全然変化がなくて心配されたりしますけれども、何の変化もないわけではないと考えてもらえればいかなと思います。

それから発達の初期の段階ですけれども、自我の芽生え、養育者と距離が近いと言われています。そして少しずつ

つ離れていくんです。離れていくと、自分とお母さんとは違うんだとか、お友達とは違うんだと区別ができるようになる。今までとは違う大きな変化が訪れてきます。

甘えと自己主張。甘えは他者との距離を少し縮めるという行為。一方、自己主張は他者との距離を守ろうとする行為。それが行ったり来たりする。依存と反発を繰り返してゆつくり自分をコントロールできる土台を作っていくといわれていますが、これはすごく時間がかかります。ベースになるのは信頼できる人との関係です。

泣いたりとか怒ったりとか色々な表現がありますが、これは感情を表現しようとしていることなので、そのことを受け止めたうえで背景に何があるかを考えられると、「自分のことを受け止めてくれている」という安心感につながり、自己肯定感が育っていきます。

コミュニケーションの発達支援はキャッチボールが大切です。リングの絵を見せてリングという言葉覚えさせても、リングを食べたいということにはつながらない。言葉を言えるということと、コミュニケーションの道具として言葉を使うことは違います。

家族との連携、協働というところで、子どもへの支援のニーズと同様に家族への支援のニーズがあると考えられています。例えば、家族の悩みや不安な気持ちに寄り添うという支援の仕方があるんですけれども、カウンセリングニーズと言われたりします。家族に

とって何が問題でどういったことを解決したいのかまだわかっていない段階で使います。そして家族の悩みとかがわかってくると家族と一緒に具体的な取り組みを考える支援を行う。これがコンサルテーションニーズと言われているんです。家族のニーズは多様化しているので、ソーシャルワークの視点、早期発見・早期療育、そんな中で色んな人とつながっていくことが必要です。家族同士のつながりを支援すること、保護者会とか先輩のお母さんに来てもらって、ピアサポートが大事なかなと思います。

閉会あいさつ（松木常務）

みなさん今日はご苦労さまでした。長時間こうして検討する時間を設けられたということで、とても充実した一日であったと思います。先生もお付き合ひありがとうございました。まとめに分かりやすく整理したご意見をいただきまして、きつと参考にさせていただきます。たくさん多いんじゃないかと思えます。

一つ一つのケースを経年の・経月的にまとめると、とてもよく子どもの育ちの姿が分かってくるので、ここでも変わっていると聞くことがすごく大事になります。みんな一生懸命に園児や仲間を見つめていることに私は今日ものすごく感動しました。涙が出るほど感動しました。そして、うちの職場は間違っていないと思いました。

共育ち、これってものすごく大事だ

と思います。職員も園児も親御さんたちも、もう一つ付け加えるなら地域も、共に育っていくことがとても大事です。親として、保育集団として、私たちは子どもの育ちと権利の保証という大きな役割を担っていると思います。本当にこれからも焦らずゆつくりと子どもを見つめながら育っていくという信頼関係を楽しく受け止められる保育・療育の場であってほしいし、そのことを夢として、私たちは人生を貫きたいと思っています。そしてみなさん、明日からまた子どもに愛をいっぱいあげることにはしませんか。よろしくお願いしたいと思います。



発表者



桃郷の理念



- ① すべての子どもたちが平等な権利を享受し、地域社会に参加できることを目指します。
- ② 保護者、家族、地域と共に学びあい、共に育ちあうことを目指します。
- ③ ひとり一人の子どもの発達を理解し、生活を通して豊かな人生を歩む基礎づくりを目指します。
- ④ 地域福祉の担い手として、地域ニーズに応える取り組みを実践します。
- ⑤ 保健、福祉、医療、教育、地域の皆様と手を取り合い、子どもを支える地域づくりを目指します。

今回のちょっとのぞき見は、児童発達支援センターの様子をお伝えします。桃郷の児童発達支援センターは、ひまわり園、つぼみ園、つくしんぼ園の3園です。どの園も、秋に運動会という大きな行事を乗り越え、子ども達のグンと成長した姿を感じています。ますます元気でパワフルになった子どもたちの冬の行事の様子を紹介したいと思います。



ひまわり園～凧揚げ大会



ひまわり園では、新年最初の親子保育は凧揚げで始まりました。ビニールの凧に子ども達はマジックでお絵描き。ぐるんぐるん気持ちよさそうにペンを走らせます。お気に入りの絵柄が出来上がると、今度は大人の出番。竹ひごを貼り、タコ糸をつけ…。凧はバランスが大事！とあって、作業も丁寧に真剣です。力を合わせて作り上げたオリジナルの凧。今度は力を合わせて空へ上げます。今年はよく風が吹いていて、ぐんぐん凧が揚がっていきます。本当に今年はよく揚がったので、揚げりすぎて糸同士がからまったり、木に引っかかってしまったりするほど…。そんなトラブルもありましたが、楽しい新年のスタートになりました。

つばみ園〜クラルテ人形劇鑑賞

年に1度の人形劇鑑賞会を親子保育で開催しました！
 今年はひまわり園のお友達と一緒に。かわいい人形たちや楽しい音楽
 で、あっという間の1時間でした。桃郷が大切にしている
 “本物に触れる” 機会…。子どもたちの真剣なまなざしや
 満面の笑みから、心の根っこに届いていることを実感
 し、充実した時間となりました。



受付は5歳児さん♪ チケットに
 スタンプを押してくれました！



いろんな楽器もみせてくれたよ♪



本物の人形劇に…
 みんな興味津々!!



5歳児さんは、お礼の花束も渡したよ☆

つくしんぼ園〜ワクワクウキウキ・クリスマス会



年の瀬も近づいた昨年の12月。つくしんぼ園ではクリスマス会を行いました。星やサンタのオーナメントで飾り付けられ、玄関には大きなモミの木がありクリスマスムードの園舎。いつもよりおしゃれをして登園した子ども達も早くサンタクロースに会いたいと楽しみでいっぱいでした。5歳児のキャンドルサービスから始まり、真剣な表情で火を灯す子ども達に思わずうっとり。手作りのオーナメントをモミの木に飾り、さあそろそろ…。すると、「ドンドンドン」と靴の音と共にサンタクロースが登場。満面の笑みの子、ちょっぴり緊張気味の子と様々な表情でお出迎えしていました。ゲストにはバイオリン奏者の方をお招きし、心に響く演奏を聴かせてもらい本物体験もできました。ティーパーティーではほっこりした時間を過ごし、最後にはサンタクロースからのプレゼント。ひとりひとり手渡ししてもらい、子ども達も嬉しさでいっぱいでした。楽しい時間はあっという間、サンタクロースが帰ってしまう寂しさもありましたが、素敵なプレゼントを大切に抱えてとても楽しいクリスマス会になりました。

発達講座⑬

『まねっこ(模倣)』

発達の読み解くと？

つくしんぼ園

発達相談員 山本 翔太

子どもたちはある時期から、いないいないばあや、おつむてんなどをはじめ、大人が普段している動作(ex.携帯電話の操作など)をまねっこするようにになります。さらには、ヒーロー・ヒロインなどのセリフや動作を再現するなど、生活や遊びで様々な「まねっこ」を楽しむようになります。実は、「まねっこ」ということばの語源は、「まねぶ」(真似ぶ)から来ていると言われています。まねっこ(以後、模倣と呼びます)は、人にとって大切な行為として考えられてきました。では、

そのような模倣行為はどのようにして獲得されていくのでしょうか？
生後6、7か月頃から、すでに子どもと大人との間で模倣に似たやりとりが見られます。例えば、離乳食を始めた子どもに、大人が「あーん」と口を開けて見せながら、スプーンで口元まで物を運んで食べさせようとします。そのような経験の積み重ねの中で、子どもは自分の口と大人の口が果たす役割が共通することに気づき始め、大人が口を開けると同じようなふるまいをするようになります。その後、生後10か月前後になると表情を模倣したり、ボールを「転がすー受け取る」、食べ物を「食べさせるー食べさせてもらう」といった役割交替のあるような模倣をするようになっていきます。この時に、まだ子どもの中には、「まねっこするぞー!」という明確な意図はないかもしれませんが、それでも、他者とそ

のような交互的なやりとりを楽しむことを通して、相手が意図をもった存在だと気づいていくようになります。そして、1歳を越える頃には、他者が過去にやっていた行動を少し時間が経ってから再現するような姿(延滞模倣)が見られるようになります。大人が日常的に行っている様々な身ぶりを模倣すること(ex.掃除機をかける)が増えていきます。やがて、1歳半を越えてくる頃には身ぶりなどを使って遊びを楽しむなど、「ぶり遊び」へと発展するようになります。イメージする力が広がり、自らの意図も明確になっていきます。

このように、模倣行動を広げていくプロセスを通して、子どもは相手の行為の意図を理解すると共に、喜びや怒り、悲しみなど、表情の意味も理解できるようになります。また、他者の意図がわかるからこ
そ、そこから様々な物事を学んだり、イメージを膨らませていくようにもなります。つまり、模倣行動は自分が生きる文化や社会の意味を理解する一助になると言えます。また、自らの意図が明確になることは、自我の育ちにもつながります。

一方で、発達に「まねっこ」をもち子どもの中には、このようなプロセスに時間をかけていくこともあり、時には人よりも先に、物へのかかわりが強く出現することがあります。そのような場合には、その関係を止めるのではなく、まずは子ども・物の関係の中に大人が寄り添っていくことや、発達講座11(2024年8月)で述べられていたようなふれあい遊びを豊かにしていくことにより、自分と相手との中で楽しい、心地よい関係を深めることもよいかもしれません。

管理者からの施設紹介⑫

放課後等デイサービスあすなろつばさ

管理者 松岡 浩司

☆施設の概要

沿革：2018年(平成30年)9月開設
住所：かつらぎ町中飯降1062-1
定員：20名
利用者：主に支援学校・支援学級に通う小学校1年生～6年生
地域：伊都地域
(かつらぎ町・橋本市・九度山町・高野町)
活動時間：
平日 学校終了時～午後5時30分
土曜日 午前10時～午後3時
長期休暇 午前10時～午後5時

☆目標としていること

- ◎一日学校で学習し、あすなろつばさに到着したらほっとできる二つ目の家のような存在でありたいと思います。
- ◎職員も一緒に遊ぶことで、共に学び、共に体験し、信頼関係を深めていきます。小学生だからこそ自分の気持ちを出して、喧嘩もして、でもいつの間にか仲直りをして楽しく遊んでいる…そんなつばさでありたいです。
- ◎しっかりとヘルプを出せたり、自分の得意なことや好きなことが見つけられる環境をつくっていききたいです。
- ◎はじめと終わりにあつまりをし、間に活動を取り入れることで静と動の動きを意識し、メリハリのあるように工夫しています。

☆あすなろつばさの1日

- ・各学校へ迎えに行き、全員揃ったらあつまりが始まります。今年は4年生が基本的に毎日リーダーをしてくれて、あつまりの進行をしています。1日の予定や呼名をし、みんなで歌を歌います。
- ・あつまり後はおやつを食べて、設定活動のない日は、ホールや園庭に分かれて遊び始めます。冬だと、園庭で縄跳びやマラソン、おにごっこをしたり、室内で粘土や製作、読書などをして楽しんでいます。
- ・活動後は掃除をして、帰りのあつまりになります。楽しかったことの発表など今日の振り返りをし、さようならをしたら各送迎の車に乗り込み、送迎後1日の終了となります。
- ・あすなろつばさの集団・あそび・活動を通して、しっかりと自分の気持ちを出せることで、人とのやりとりや信頼関係、大人になっていくための土台づくりのお手伝いができたらいいなと考えています。